

18. カキのアオマツムシの発生と被害（情報）

[要約]

近年、県内の早生カキではアオマツムシの発生が多く、分布を拡大しているため、被害が多くなっている。

研究室名	病虫研究室
------	-------

連絡先

0869-55-0543

[背景・ねらい]

平成 12 年に県内の早生カキ産地でアオマツムシによるとみられる果実被害が多発生したため、発生と被害状況を調べた。

[成果の概要・特徴]

1. 平成 12 年に被害が多かった岡山市牧石地区で聞き取り調査した結果、①本虫の発生は以前からみられていたが、ここ数年発生量が多かった。②成虫の発生は 8 月中旬から始まり、9 月中旬に最も多かった。③極早生種の「西村早生」で果実被害が著しく、着色期以降に食害を受けた、ことが判明した。
2. 平成 13 年には、玉野市と赤坂町でも本虫によるカキ「富有」の果実被害が確認された。

以上の結果、県内の早生カキを中心にアオマツムシによる被害がここ数年多くなっており、被害の発生地域が拡大している。

[成果の活用面・留意点]

1. 本虫に対する登録農薬はない。
2. ウメは幼虫の主な発生源となっているので、幼虫発生時期の 5～6 月に他害虫に登録のある有機リン剤で防除する。

[具体的データ]



写真1 アオマツムシ雌成虫

体長 23～28mm、鮮やかな緑色
で舟形、触角が長い（市橋原図）



写真2 葉の被害

葉脈や縁を避けて穴をあける
（市橋原図）



写真3 果実の被害

直径 1～7 mm、深さ 1～5 mm の半球型のくぼみ
を残すように加害する。加害部位はへた部が最
も多く、加害痕は数日で黒色化する。
ハスモンヨトウの加害痕と類似しているが、虫
糞がなく、主に着色果が加害される点で異なる。

本虫の生態と被害に関するこれまでの知見

- ・ 明治期に海外から侵入し、都市部の街路樹や近郊の雑木林を中心に分布を拡大。年 1 回発生する樹上性のコオロギで、秋に成虫が街路樹などの樹上で「リー・リー」と独特の甲高い声で鳴く。
- ・ サラ、ヒイギナテンなどの緑化樹、コナ、クなどの雑木林、ウメ、ウツリ等の果樹に産卵され、5 月から幼虫が発生する。カキでの産卵は少ない。
- ・ カキの被害は 1979 年に岐阜県で初めて確認され、関東以西の暖地で被害が発生している。成虫は葉及び果実を加害するが、果実の被害が大きい。果実では成熟果（着色期以降）を好んで加害し、未熟果はあまり加害しない。このため、本虫の発生時期と成熟期が重なる西村早生等の極早生種で被害が甚大である。カキの他、ナシ、リンゴの成熟果を加害する。ミカン、ブドウは加害しない。
- ・ 被害が確認されているカキの品種は、甘柿の伊豆、松本早生、次郎、富有、不完全甘柿の西村早生、筆柿、蓮台寺柿、渋柿の堂上蜂屋の 8 品種で、甘柿、渋柿に関係なく加害する。
- ・ 発生源に近い樹ほど被害が大きい傾向があり、雑木林や無防除のウメ園の近くでは被害が大きい。
- ・ 一般的に本虫の発生は、年次変動が大きい。
- ・ 薬剤防除が主体となるが、本虫に対する登録農薬はない。有機リン剤の効果が高いが、使用日数がいずれも収穫 30～45 日前と厳しく、成虫の飛来時期に使用できない。さらに、有機リン剤以外の薬剤は、防除効果の知見が乏しい。

[その他]

試験研究課題：カキのアオマツムシの発生と被害

予算区分：県単

研究期間：平成 12～13 年度

関連情報等：農文協 農業総覧原色病虫害診断防除編 7